

文芸こうふ

令和4年度

第29号

次世代へ 輝く文化 引き継ごう
第48回甲府市民文化祭作品集



甲 府 市 文 化 協 会

次世代へ 輝く文化 引き継ごう

文芸こうふ

令和4年度

第 29 号

甲 府 市 文 化 協 会



「文芸こうふ」刊行にあたって

甲府市文化協会

会長 樋口 雄一

第四十八回甲府市民文化祭は、「次世代へ 輝く文化 引き継ごう」のテーマのもと、展示九部門・発表九部門に約一、八〇〇人の会員の皆様にご参加いただく中、令和四年十月二十九日から十一月十二日の期間中、七日間にわたり、開催いたしました。

三年ぶりの開催となりました、今回の文化祭には、コロナ禍で制約を受ける中であっても、日々、文化芸術活動に取り組まれてこられた会員の皆様方の、ブランクを感じさせない、作品展示の数々や、日頃の研鑽の成果などを発表いただく中、延べ六、二〇〇人を超える多くの来場者の皆様に、文化芸術の魅力を満喫いただけたものと感じております。

これもひとえに、会員の皆様方の日頃のたゆまぬご精進と、コロナ禍において、来場者の安全と安心を第一に考え、献身的な運営にご尽力を賜りました文化祭実行委員の皆様方のご努力の賜物であると、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

この度、甲府市民文化祭の作品集として、「文芸こうふ（第29号）」を刊行し、皆様のお手元にお届けいたしますので、今後の文化・芸術活動にご活用いただければ幸いに存じます。

文化協会といたしましても、甲府市にある重層的で多様な歴史や伝統、文化を次世代に引き継ぐとともに、「文化のまち甲府」の発展に向け、鋭意取り組んでまいりますので、皆様方の尚一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

結びに、「文芸こうふ」の刊行に際し、ご尽力を賜りました皆様に感謝を申し上げますとともに、本市の文化・芸術活動の更なる振興と発展を祈念いたしましたして、刊行にあたっての挨拶といたします。



「文芸こうふ」刊行にあたって

甲府市民文化祭実行委員会

委員長 鶴田一杏

第四十八回甲府市民文化祭は、「次世代へ 輝く文化 引き継ごう」のテーマのもと、開催されました。年度当初、コロナ感染症は周期的に増加をし、なかなか終息とは至らず、さらには、国際情勢が不安定化するなかで、一層の行動制限や緊張感を伴う日常生活が求められておりました。

しかし、そんな閉塞し制約された生活を行うなかでこそ、あらためて、文化芸術の大切さを再認識することができました。いまこそ、潤いと心の安らぎをもたらしてくれる、文化芸術活動が、求められているのではないかと。今年こそは、何としても文化祭を実施したい。

そんな願いが通じたのか、なだらかに感染者数が減少し、この状況を受け、それまで様々な利用制限が課せられていた公民館において、使用ガイドラインも緩和されることとなりました。

これらを踏まえ、文化祭実行委員会において、「市民がつくる文化祭」をより一層前面に出し、実行委員が丸となって、文化祭を開催することを確認いたしました。

そこからは、さらに作品づくりに力を注ぎ、また、仲間とともに、ひとつの作品を切磋琢磨しながら創り上げていける歓びを感じながら、鍛錬に励みました。

文化祭では、展示作品をゆつたり鑑賞し、茶の湯を楽しむ、奥深い楽しい演技に心を躍らせ、歌声に心が癒され、多いに、文化芸術を、堪能していただけたのではないのでしょうか。

結びに、この文化祭が無事、実施できましたことを、多くの関係各位にお礼を申し上げあげますとともに、熱い想いのこもった作品集を、皆様のお手元にお届けできることを、心よりの喜びとし、刊行にあたっての挨拶といたします。



「文芸こうふ」発刊に寄せて

甲府市教育委員会

教育長 數野保秋

木々の色づきとともに開催されました第四十八回甲府市民文化祭は、新型コロナウイルスの影響により三年ぶりの開催となり、会員の皆様の文化芸術に対する熱い思いのもと、多くの作品の展示や発表によって、日頃の取組の成果が存分に発揮された文化の祭典であったと思います。

教育委員会いたしましたも、誠に意義深い文化祭となり、これもひとえに、文化協会に加盟されている諸団体の皆様や会員各位が、一意専心で文化芸術に取り組んでこられたご尽力の賜物と、衷心より敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

「次世代へ 輝く文化 引き継ごう」をテーマに開催されました本文化祭は、三年の月日を経て、より一層の広がりと輝きを見せ、地域の多種多様な文化芸術を後世に引き継ぐことの大切さを、私たち一人ひとりが実感する貴重な機会となりました。

この度の「文芸こうふ」は、第四十八回甲府市民文化祭の集大成として、文化協会の大きな財産を引き継ぐことのできる貴重な記録となります。どうか一人でも多くの方々にご高覧いただけることをご期待申し上げます。

結びに、本冊子の制作にあたり、ご苦労いただきました編集委員の皆様にご心から敬意と感謝を申し上げ、発刊に寄せるあいさつといたします。

特別出品

銘「釜無川 滝石（台付）」



甲府市文化協会

会長 樋口雄一

釜無川の滝石は、甲斐駒ヶ岳より釜無川の支流である大武川おおむかわに流れ落ち産出されます。

石質は、石灰岩質を含む、蛇紋變成岩の石で、石灰岩質の部分が侵食されて、滝石の形姿が作りだされます。

滝石は、県外でも何カ所かの河川で産出されますが、釜無川の滝石がトップクラスであり、全国でも有名な産地とされています。

第四十八回甲府市民文化祭

文化祭賞・奨励賞



文化祭賞

「牡丹」

(きり絵)

富山武男

(屋形)



奨励賞

「涼」流れる」

(水彩画)

地場正樹

(酒折)



奨励賞

「紅葉の森」
(水彩画)



堀内

(池田) 明

奨励賞

「秋桜」
(和紙絵)



小笠原

利子
(千塚)

書道部門



文化祭賞

「二華開五葉」

網倉直美

(上右田)



奨励賞

「獲嘉榮」

安永美世

(美咲)



奨励賞

「秋露如珠」

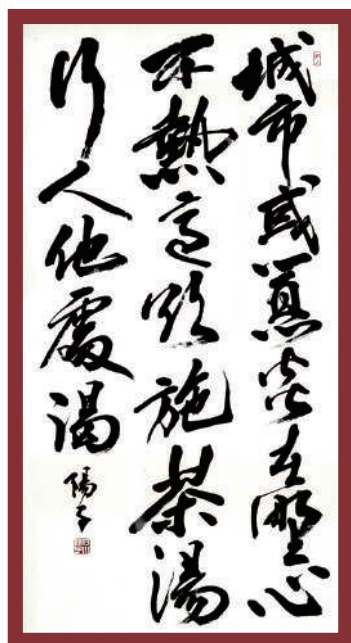


茅野 三千代

(丸の内)

奨励賞

「詠畫夏」



石川 陽子

(城東)

写真部門



文化祭賞

「バランス良く」

中村 瑞夫

(山宮町)



奨励賞

「菜の花とやませみの舞」

関本

(古上条)

弘



奨励賞

「秋の水辺」

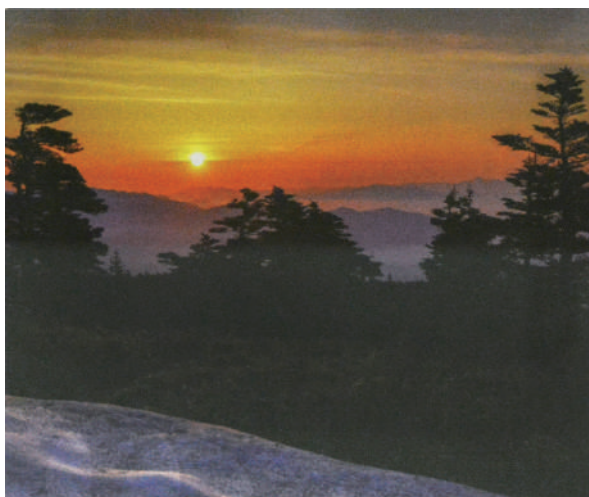


飯島信夫

(千塚)

奨励賞

「残雪を染めて」



井出ひとみ

(屋形)



文化祭賞

「四季」
(クラフト)

大 野 和 子

(善光寺)



奨 励 賞

「信楽壺」
(陶芸)

眞 壁 遂 呼

(大手)



奨励賞

「葡萄」(押し花)



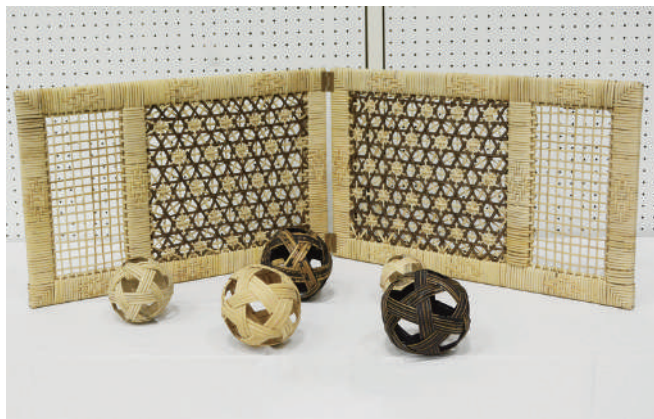
久保田

小夜子

(酒折町)

奨励賞

「てまりの詩」(籐)



内藤

佳代子

(天手)

文学部門



文化祭賞

米山 房子

(宮前町)

(俳句)

ゆるゆると三年坂ゆるく白日傘
米山 房子

奨励賞

藤原 時男

(国母)

(俳句)

晩年は
追憶数多
星月夜
時男

奨励賞

大勝 雅子

(短歌)

(大里町)

早朝にフニバインの音響さくる
日本の秋を音で確かむ

奨励賞

望月 貴美子

(川柳)

(富竹)

晩学に興味の仲間という宝
望月 貴美子

奨励賞

渡辺 さちえ

(川柳)

(湯田)

愚妻ども夫引き立てるカスミ草
さちえ

水石部門



文化祭賞

「釜無川産 滝石」

大野 浩 伸

(塩部)



奨励賞

「梓川産 岩形石」

中 澤

(城東)

健



盆栽部門



文化祭賞

「苔とすみれの饗宴」(すみれ)

杳間 妙子

(緑が丘)



奨励賞

「すみれの祭典」(すみれ)

樋川 直哉

(下飯田)



目次

「表紙」写真
 撮影 広瀬 修
 題字 沖津 松風

「文芸こうふ」刊行にあたって……………甲府市文化協会会長 樋口 雄一
 「文芸こうふ」刊行にあたって……………甲府市文化祭実行委員会委員長 鶴田 一杏
 「文芸こうふ」発刊に寄せて……………甲府市教育委員会 教 育 長 數野 保秋

第四十八回甲府市民文化祭

大里地区文化協会……………31

文化祭賞・奨励賞……………2

貢川地区文化協会……………33

文 学 部……………23

新紺屋地区文化協会……………34

詩 の 部……………24

琢美地区文化協会……………35

短 歌 の 部……………31

中道地区文化協会……………35

朝日地区文化協会……………31

山城地区文化協会……………37

俳句の部……………	41	川柳の部……………	53
勧学「花みずき」……………	41	川柳甲斐野社……………	53
図書館句会「翡翠」……………	41	川柳甲斐野社……………	53
北新地区文化協会文学部……………	43	朝日地区文化協会……………	55
山城地区文化協会……………	43	朝日地区文化協会……………	55
朝日地区文化協会……………	44	池田地区文化協会……………	55
大里地区文化協会……………	45	春日地区文化協会……………	56
貢川地区文化協会……………	45	貢川地区文化協会……………	57
国母地区文化協会……………	46	琢美地区文化協会……………	58
琢美地区文化協会……………	47	琢美地区文化協会……………	58
千塚地区文化協会……………	48	羽黒地区文化協会……………	58
羽黒地区文化協会……………	49	東地区文化協会……………	59
		展示・発表の部……………	63
		華道部門……………	64

茶道部門	88
吟剣詩舞道部門	86
合奏部門	84
合唱部門	82
演劇部門	80
盆栽部門	78
文学部門	76
美術部門	74
水石部門	72
書道部門	70
写真部門	68
工芸部門	66

能楽部門	90
舞踊部門	92
邦楽部門	94
民謡部門	96
青少年作品部門	98
第四十八回甲府市民文化祭	100
歴史探訪コーナー	100
実行委員会名簿	102
あとがき	103
編集委員会	104

評

美術部門

文化祭賞 「牡丹」(きり絵)

富山 武男

(推薦理由)

○ 牡丹の花が咲きそろう作品。牡丹の花の輪郭が実にうまく切られている。花のやわらかな線が絶妙である。背景の空に蝶が二羽いることで広がりとか空気が出ているように思う。花の色彩も良い。

奨励賞 「紅葉の森」(水彩画)

堀内 明

(推薦理由)

○ 20号の大作にチャレンジしていて良いと思う。もう少し着彩の面でかきこみが必要と思われるが、紅葉の森の様子が伝わってくる良い作品に仕上げたと思う。森の奥の方の処理にもう少し工夫がほしかったが、大作に描くことで勉強になるので続けてほしい。

奨励賞 「涼」(水彩画)

地場 正樹

(推薦理由)

○ 画面に川の流れを大きくとり、しっかりした構図で描いている。川の流れの工夫、樹間に光のとり入れ方など実にうまく描かれていて良い。画面に明暗の対比など工夫されていて、画面がひきしまつて見える秀作である。

奨励賞 「秋桜」(和紙絵)

小笠原 利子

(推薦理由)

○ 和紙絵で大きな画面に秋桜を表現している。秋桜の細い茎、花びら、小さな葉などこまかく表現されていてすばらしい。背景の空の様子もちぎりで絵ならではの表現でうまくまとめている。

書道部門

文化祭賞

「一華開五葉」

網倉直美

(推薦理由)

○ 半切三分の一サイズに五字をバランス良く配置。

墨量、潤濁が自然に表現され心地良さを感じる。今後の活動が期待される。

奨励賞

「秋露如珠」

茅野 三千代

(推薦理由)

○ 「秋の露は白玉のごとく清らかである。」という内容です。文字もおだやかで品のある書きぶりと筆使いで、清らかさを感じます。全体のまとまりもよくまとめられています。

奨励賞

「獲嘉榮」

安永美世

(推薦理由)

○ 力強い隸書体三文字がバランス良く配置されている。刻りは横画の表現が特にきわだって良い。金箔もきれいな仕上がりになっている。

奨励賞

「詠畫夏」

石川陽子

(推薦理由)

○ 五言絶句を半切二分の一に三行で表現。軽快なリズムで運筆され躍動感がある。

写真部門

文化祭賞 「バランス良く」

中村 瑞夫

(推薦理由)

○ 公園の広場なのか、子供達の仲良しグループが、シーソー台の上で遊ぶ楽しそうな一瞬の表情をとらえ、遠くうしろでは食事をしている人達も写っています、とても楽しい画面になっています。

奨励賞 「菜の花とやませみの舞」

関本 弘

(推薦理由)

○ やませみの狩り、写真ならではの獲物を捕える瞬間の力強い生命力がみえ、この一瞬を撮るまでの待つ忍耐力は撮る人でないとわかりません。

奨励賞 「秋の水辺」あきのみずべ

飯島 信夫

(推薦理由)

○ 鮮やかな紅葉の葉が落ち、奥の方ではまだだよと黄金色の葉が陽にかがやいて、川筋の水が流れ、傍らの岩の上の落葉が最後のかがやきを見せています。

奨励賞 「残雪を染めて」ざんせつをそめて

井出 ひとみ

(推薦理由)

○ 観光地、少し高台の朝、朝やけの朝が、やわらかなあまい光を足もとまで照しています。この画面のポイントは、中景の黒い木々のシルエットで生かされています。

工芸部門

文化祭賞 「四季」(クラフト)

大野 和子

(推薦理由)

○ 移ろいゆく季節の変化を様々な技法で表現した楽しい作品である。

奨励賞 「信楽壺」(陶芸)

眞 壁 遂 呼

(推薦理由)

○ 釉薬の流れとバランスがとてもよく、自然の力のおもしろさを感じる作品。

奨励賞 「葡萄」(押し花)

久保田 小夜子

(推薦理由)

○ 大胆に表現した葡萄に存在感を見せる作品。

奨励賞 「てまりの詩」(籐)

内 藤 佳代子

(推薦理由)

○ 籐の枠から飛び出た遊び心のある作品。

文学部門

文化祭賞

(俳句) ゆるゆると三年坂ゆく白日傘さんねんざか しろひがさ

米山 房子

(推薦理由)

○ 心を落ち着かせ、ゆったりと三年坂を登っていき
ます。手には白日傘。暑さをしばし忘れ、周囲の景
色に感動し、喜びもひとしお。まるで京都を舞台に
撮影している映画のワンシーンのようです。一読し
て清浄な気持ちにさせてくれる句です。

奨励賞

(短歌) 早朝にコンバインの音響きくる日本の秋を音そうちよう おとひび にほん あき おと
で確かむ

大勝 雅子

(推薦理由)

○ 秋の到来を早朝の田んぼから響いてくるコンバイ
ンの音によって感じとった、清新な一首です。

奨励賞

(川柳) 晩学に興味の仲間という宝ばんがく しゆみ なかま たから

望月 貴美子

(推薦理由)

○ 長く人生を歩むと友達は沢山います。そんな中で
文芸に勤しむ大勢の同志を得、励まし合いながらの
仲間こそ真の宝と言いつける。文芸を志した幸運が見
事に表現された一句。

奨励賞

(俳句) 晩年は追憶数多星月夜ばんねん ついおくあまたほしづくよ

藤原 時男

(推薦理由)

○ 星月夜は秋の季語。夜空の星の明るさが月夜のよ
うに明るい夜のことです。作者は人生の晩年を迎え
て、それまでの人生のさまざまな場面を追憶してい
ます。見上げる星月夜の輝きが作者の思いを静かに
清らかに照らし出しています。

奨励賞

(川柳) 愚妻でも夫引き立てるカスミ草ぐさい つまひび たた つかすみくさ

渡辺 さちえ

(推薦理由)

○ 妻の謙虚さを上手に詠んだ作品で大いに共感を得
られます。幸せな夫が垣間見え微笑ましい。川柳の
滑稽さが秀でている作品です。

水石部門

文化祭賞 「釜無川産」かまなしがわ 滝石」たきし

大野 浩 伸

(推薦理由)

○ 滝石の名産地・釜無川の産で、滝石としてまれに見る石質と石色で、川ずれも良く石全体の格調美を高める石である。秋風にのって、滝音が聞こえて来るような楽しい石です。

奨励賞 「梓川産」あすみがわ 岩形石」いわがたし

中 澤 健

(推薦理由)

○ 長野県・梓川の産で、主石・水盤・卓と三位一体の取り合せも非常によい。水盤内の主石もほぼ的確におさまり、主石を引き立てている。更なるは、本石に一段の古色がほしい。

盆栽部門

文化祭賞 「苔とすみれの饗宴」きょうえん (すみれ)

杓 間 妙 子

(推薦理由)

○ 苔の中で咲くすみれを里山では良く見かけますが、鉢の中で秋にもかかわらず苔といるいろなすみれが並んで生き生きし花が沢山咲いていてすばらしいです。

奨励賞 「すみれの祭典」さいてん (すみれ)

樋 川 直 哉

(推薦理由)

○ 日当りの良い庭で大鉢にてケイジヨウスミレとヒバントスコミニユスを育て、みごとに両方に花を沢山咲かせたのがすばらしいです。

文
学
部

詩の部

白い点

秋山一彦

白い点が真つ直ぐ続く

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

何かの意味を持っているのだろうか

何者かへの暗号か

チヨークでつけたような

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

(そう言えば、昨夜のテレビで

チヨークは

卵の殻で作られているとの報道を見て

ビククリした)

(そう言えば

私はジャンケンが弱い

どうも勝つ気がしない

グウ、チヨキ、パーを

選択する時には

どのような心理が働くのだろうか)

思索していると

天から白い斑点が降りて来た

見上げると

天の声と思いきや

カラスの糞であつた

コロナの夢

小沢啓子

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため

三月から日本全土が自粛体制に入った

家に留まり人との接触を極力避ける

カゼの兆候があれば

ウイルスに乗り移られたかのように感じ 身を隠す

多くの人々と笑顔で語り合う時を封印した

家で食事を囲む時 家族のちよつとしたクセが

いらだちの原因となる

春はふるさとの親や親戚を訪ね

温かな交わりを喜ぶ時なのだが

幼い我が子をやさしく起こし

一人でトイレに行かせて 出かける準備をしていると

玄関のチャイムが鳴った

ドアを開けると 見上げるように背の高い我が子が

高校の詰め襟姿で 書類を差し出し

「授業体制が変わったので 書類を出せば

うちは授業料がやすくなる」

と 家計を気遣う さわやかな笑顔

幼い我が子と 笑顔の青年 どちらも確かに我が子

とまどつて 青年に

「あなたは 誰？」と聞けば

「それは あなたに聞きたい」

と やはりさわやかな笑顔で言う

そこで目が覚め 我が夢ならば

「それはあなたに聞きたい」という言葉は

もつともだと おかしくなった

実際の我が子は ホームセンターに勤める社会人
めったに笑顔を見せない

「お客さん達の いいアドバイザーになってね」
と そつとメールを送った

お勤めの見送りに玄関に立つと
「いなくていい」と 仏頂面で言う

もつと子育てが成功していたら 夢の中のよう
感じのいい青年になっていたのか

コロナの圧迫感が生んだ夢に 落ち込んだ

息子からのメールが スマホに届く

「マスク入荷したけど 買いますか？」
じきに また届く

「もう売り切れました 次に入荷したら買いますか」

「二箱 お願い」と返しながら

今のあなたでいいのよ と 心の中でつぶやいていた
祈りながら 育ててきたのだから

コロナ後は ホームが中心になる時代

コロナを克^こえて

数野 徳子

私はいのちを抱きしめ

今

今を

今を生きる

コロナを克えて

時空を超えてウイルスはどこへ

人と付着しないと

生きていけないのか

我々は耐え忍ぶ力を得て

愛の力で生き延びていく

ただじつと

奇跡の光がきつといつか

コロナを克えて

こんなにもいのちが愛おしい

新たな日常に

赤ちゃんの誕生

地球を守る証となる

離れていても 響き合う絆

寄りそい つながる愛のわかちあい

「行って来ます」「行ってらっしゃい」

「ただいま」「おかえりなさい」

生物の種は宇宙をめぐる

永遠へと咲き続ける

私はわたしを抱いて

今を生きる

初恋

川井マキ

時という春風の
オブラートに
包まれても
失恋というものは
いつまでも苦い
初恋については
語りたくもなく
かといって
忘れることもできず

秋めいて

名 取 夏 美

ジリジリしたオレンジ色から
少しずつ回りは秋めいてくる
金木犀の香りが鼻をくすぐり
頬を撫でる風も涼しくなった
見渡す限りの田んぼ 青き稲も頭をたれ
今か 今かと 稲刈りの時を待っている
幼き頃から変わらない田園風景である
同時に腰をかがめながら稲刈りをする
父母の姿を私に思い出させる
刈り取られた稲はひとつずつ手に取り
干し竿に洗濯物を干すようにかけていく
腰をかがめながらの農作業
散らかっていた稲は片付いていく
とんぼが飛び交い 青空は高く 高く
雲は流れて 夕焼けがまぶしく目に入る

何時までも守っていきたい風景
その場所に今の自分がいる
さわやかな秋風 汗ばんだ体を通り抜け
幼き頃の自分と重なる
それと同時に今は亡き 父の姿を思い出す

名川数小秋
取井野沢山
夏マ徳啓一
美キ子子彦

(甲府詩人会)

短歌の部

朝日地区文化協会

塩部三丁目

古屋玲子

水温みハクセキレイは尾を振りて流れを低く飛び交いており

三度目は小さく小さく咲いている猛暑の中に白きてっせん

東北はもう雪なんだと外に出れば東の空に青きオリオソ

塩部三丁目

丸山政江

手ばなした友の屋敷のかた隅の日影にひそりコスモスの咲く

老女とともきたる共に学びし幾とし月の乙女のおもかげさがす

深山しんのふところの中一人ばち全身で聞く静寂おとな和音

大里地区文化協会

西下条町

吉岡典子

夏の日の夕暮れ野道じゅうはち十八歳の語ることははポツリポツリと

「ガンバレ」は今のこの子には違うって胸かきまかせて言葉ことばをさがす

じじばばの誰たれもが強く願ねがってて一回戦は勝かちたせてやりたい

ブルーからはちきれそうな子等の声この声聞くは三年振りかな

大里町 大久保 ヨシ子

窓外にミカン畑を眺めつつ魚市場巡る日帰りの旅

長雨で野菜の高値続く中畑にあまた捨てられし茄子

大里町 大勝 雅子

早朝にコンバインの音響きくる日本の秋を音で確かむ

壁打ちに返るボールは鈍い音夕べの雨を含んでいるらし

大里町 輿石 恵美子

縄文の世より介護はありきとう虐待などはあつてはならず

地鎮祭をすると息子の着る直衣うすびの夏の日ざしに涼し気ならず

労られし骨ありと聞く縄文の世の豊かさを思いみるべし

大里町 石原 とし子

パラ競技足で弓引くスタツツマン残されたものを強い味方に

コロナ禍に皆マスクつけ散歩する彼岸花咲く荒川の土手

金メダルの陳夢と互角に戦うは平野ガンバレ世界卓球

大津町 芹澤 眞木子

ケアマネの介護サービスのアドバイス受けて夫の先ぎき憂う

長期戦になるのであるう脊髄のオペを拒める夫に添いいつ

帰ってきたと午前三時のケイタイに告げくる夫はまぼろしのなか

我が狭庭ふいと現るる秋の蝶語りは足りぬ友七七忌
人として生まれて来たるこの星に武器・金・核と脅す国あまた
幼子を賀状に残した昭和の日令和の今に友から写メが

西下条町 小林 ユキ子

貢川地区文化協会

「大丈夫」「大丈夫だよ」子のスマホに新宿駅の騒音入る
母さんと呼ばれた気がし起きあがる夜明けの風の肩に冷たし
誕生の日付も名前も決められて帝王切開の娘二女を待つ

富竹二丁目 平本 巳奈子

暮れ方のコスモスなぜか風になる「まあきれいな」と声流れつつ
コスモスが綺麗ですねと声かけて後ろを過ぎて行く人のあり
小ざつぱりと装いし風コスモスをやさしく撫でて旅人となる

富竹二丁目 小野 卓

朝ごとの公園ゴルフにホールイン目指しつ願う健康長寿
敬老の価なくにと面映ゆく町より賜わる敬老祝
戦死した父の記憶のおぼろ気に孫のようなる遺影に語る

貢川本町 天野 真金

新紺屋地区文化協会

宮前町 西宮明子

梅雨時にうす紅色べにの芙蓉ようふ咲き大輪ゆらり風渡りゆく
狭庭には黄蝶の舞いて春告げる目で追うわれと遊ぶひととき
贈られし色とりどりの花愛めでつ孫たちありて敬老の日

武田二丁目 矢崎 操

花桃を別れに植えし十年余絆の糸はつくばと結ぶ
雨上り物干し竿に玉つゆが朝日に当たり光る一時ひととき
富士山の山頂に掛かる傘雲は魚が泳ぐ容姿に等し

宮前町 光本 繁子

擦れ違いハットする吾初恋の似てる面影おもかげ胸キュンとなり
墓参り元気になったと報告す頭くちかを垂れてお礼をのべる
白い花胡蝶蘭は気高くひとひらひとひら落ちてゆくなり

宮前町 光本 愛

春の陽気にときめいて爽さわやかに風もやさしく吾を誘いざなう
始めてのネイルドキドキウキウキし手のひらかざし虹色にじいろみたい
たおやかに清すがすがしくも富士山は自然の輝かがやき美しさありき

琢美地区文化協会

ふりそそぐ強き光に耐えて立つ畑のみどり我をうるおす
酷暑から一気にもどり梅雨となり我の体の救いとはなる
おはようと交す言葉の心地良きコロナ禍に行くラジオ体操

城東五丁目 青木のり子

中道地区文化協会

私はいつ迄ここで暮らすやら誰も教へてくれる人なし
八月も終つてしまふ大切な時間も物も去つてしまつて
藤村や啄木の詩吟じみるその時心ほかほかとして

右左口町 田中治江

つくばひに喉うるほして野良猫は空を仰ぎて大欠伸せり
大たんな息子料理にふるまはれ盆の一日を客人まればときぶん
散りぎはの紅葉はいいねと堀めぐり武田神社は夕光の中

天神町 望月美代子

お前ももう介護所に行く歳なのか郷の母さん腰を屈めて

八月は終戦の月盆の月義兄と夫とがにこにこ来たり

フィリピンの海に散りたる義兄の事語りし夫の顔がしのばる

右左口町 中込敬子

上曾根町 土屋喜雄

ハイビスカス真つ盛りなり軒端にてふたりの旅の記憶ひきよす

雨さりて鋭鎌の月を見てをれば今日草刈りし鎌に似てきて

ハンドルの捌きよろしく庭にみる吾娘はすでに五十路を走る

右左口町 渡辺治

今日の月どうしてそんなに明るいの隠して欲しい夜もあるのに

満天の星と月とを見比べて流れる星を心待ちする

僕を待つ朧月夜はいないけど今宵の月が手招きをする

右左口町 石川輝子

外しおくめがねは自由時間なり新聞の文字まとまつて見ゆ

棚経のお坊さんの去りしあと白檀の香り残りてをりぬ

朝夕に言葉を交はすおとなりさん今日は主人のわるぐちを言ふ

右左口町 武田東洋一

妻からのスマホの声の明るくて朝より吾を励ましくるる

眺めれば母のふところ故郷の右左口村に帰りゆくくなり

盂蘭盆の友にもご無沙汰秋はそつと忍び寄るなり

山城地区文化協会

あざやかにマリーゴールド咲きほこる我種まきて培ひし花
ヘリコプター夜空の中に光をり飛行機から見たあの夜思へり
草刈りのつらさしみじみ感じたり作業する人感謝の思ひ

上今井町 鈴木良子

勝負あり落ちし力士に土俵際そつと手を貸す心根清し
桜花咲き初む時と散りし時友と眺めし同じベンチで
衣装箱に姑の遺しし半衿にて白きマスクを四枚作りぬ

小瀬町 窪田久美

着膨れの吾等の横を走り行く若人軽き風を残して
白髪のウェーブ似合う媼にも戦後を語る指の節くれ
荒川に甲府の灯浮かぶなり千秋橋を渡れば家路

小瀬町 波切タカ子

空と雲映して澄みし水鏡母を偲べば水面は揺れる
田の中に大サギの二羽佇める今日糧あれと我も願へり
桃畑慣れぬ仕事の袋掛け緑の向かふに青空の見ゆ

上今井町 渡辺美恵子

下鍛冶屋町 越石福江

暖かき朝の日差しに誘はれて今年終りの万歩計持つ

日の当る窓辺近くにコチョウラン見れば世話する夫の背うかぶ

外燈の木漏れ灯揺らぐ公園に親子四代サッカー楽しむ

小曲町 布施道代

河口湖娘と見たり冬花火湖面に写る大輪の花

清水出いできゅうりにすいか冷やしたり「水神洞」に幼なの記憶

天の川万葉の民も眺めけむ澄みし地球に瞬きし星

小曲町 飯野妙子

七草を「唐土のトリ」と唄ひつつコロナ終息願ひて刻む

静かなる小春日和の公園に西へ遠のく飛行機の音

目玉焼きのこんもり丸きに窓越しの日差し映えたる今朝の食卓

小瀬町 伊藤久美子

冬空に亡き夫の星捜したり小さく輝く一つに決める

もどり梅雨豪雨災害列島の西に東に爪痕残す

公園の辛夷の蕾ふつくと春の陽差しに輝きてをり

総 評

地区文化協会七団体三十二名でした。

入賞作品、奨励賞（一首）選評については前掲文学部門掲載のとおりです。文学部長賞は次の五作品です。

○文学部長賞

ハイビスカス真っ盛りなり軒端にてふたりの旅の記憶ひきよす

中道地区文化協会 土屋 喜雄

ハイビスカスの紅い花が軒端に咲いています。その花を見ていると二人で行った旅が懐かしく想い起こされるのです。旅を共にした連れ合い、または親しい友はもう亡くなっているのかもしれない。そのように読んでも、相手が健在であっても、それぞれの読みが楽しめる歌だと思えます。

外しおくめがねは自由時間なり新聞の文字まとまつて見ゆ

中道地区文化協会 石川 輝子

読んでいた老眼鏡を外して新聞紙の上に置いたのでしよう。ふと見ると、眼鏡は持ち主から離れてしばし自由時間を楽しんでいるかのように思えたのです。レンズ越しに「新聞の文字まとまつて見ゆ」。ここに発見があります。

妻からのスマホの声明の明るくて朝より吾を励ましくるる

中道地区文化協会 武田東洋一

連れ合いは留守をされていて、その滞在先から電話がかかってきたのです。その明るい声を聞くと、自然と元気な気分になったのです。「朝より吾を励ましくるる」。恋女房のような雰囲気を感じられて、微笑ましい歌だと思えます。

梅雨時にうす紅色の芙蓉咲き大輪ゆらり風渡りゆく

新紺屋地区文化協会 西宮 明子

梅雨時のうつとうしい中、庭の芙蓉の花が咲いています。うす紅色の花のたたずまいが「大輪ゆらり風渡りゆく」と描写されています。季節の花から慰めや励ましの思いをもらおう。この歌を読むと、そういう心情がよく分かります。

誕生の日付も名前も決められて帝王切開の娘こ二女を待つ

貢川地区文化協会 平本巴奈子

二度目の帝王切開によって生まれてくる子を待ちのぞんでいるその母親の娘さんと娘さんの親である作中の私。面白い題材が簡潔に詠まれています。結句、一・三・二の六音の破調でリズムが生きていません。「二女を待つ娘よ」などの代案を参考に。

選奨委員

” 岡部慶子
三枝浩樹

俳句の部

勸学「花みずき」

相生二丁目

望月友良

雪に暮れ雪に灯ともす飛驒の里

厳寒の富士真向まっこうに太宰の碑

岳晴れて怒涛のごとき秋の雲

山宮町

青木国雄

最前線誰がために咲くや日輪草

初茄子食いて三寿を乗り越える

蒼き宇宙そら異例づくめの梅雨の明

貢川本町

天野真金

人住まず夏草茂る隣家かな

林間の小径に楚々と曼珠沙華

蜻蛉追う子供ら一人捨て畑に

長松寺町

笹井治子

鳳仙花開裂飛散旅に出る

秋寒やだまって日溜りよその猫

春うらら子供自転車試運転

西田町

斉藤勝正

花一枝背せなに挿したる馬上武者

万緑や慈顔におわす野の仏

秋の声ウイズコロナとなりけり

市外

河野安雄

また来たよと開く弁当花の下

百日紅母の齢にもう一步

これからと思ふことあり雲の峰

市外

西室幸生

鳶を追う帰燕の群や峽の空

雲はれて一人酌む夜の虫の声

吊し柿農ひとすじの父祖の影

図書館句会「翡翠」

住吉四丁目

秋山礼子

青嵐ネット揺らすか響動めきぬ

上の子は肩車となり植木市

灯の下に子蟪蛄の来てゐたり

国母二丁目

雨宮晴明

国母四丁目

中楯明子

万葉の森の瀬音や濃紫陽花

麦秋や八ヶ岳南麓のパン工房

問はれては大声返す滝見台

国母四丁目

梅津 勲

西高橋町

野沢 久

夏の雲あはひに低く地藏岳

亀泳ぐ淵に木漏れ日半夏生

紫陽花の紺の果てゆく晩夏かな

青沼一丁目

高橋 秋子

貢川二丁目

松村 健一郎

爛々と蜥蜴啣へて黒き猫シノノヲトル

零歳ゼロサイの泣く声もあり年新た

父の日の慈愛を偲ぶチヨコレート

屋形三丁目

土橋 博江

宮前町

米山 房子

隣家より嬰兒の声や夏の夜

音もなく山の端に消ゆ稲光

架け替えし亡父ちちの短冊秋を待つ

塩部一丁目

中込 照子

宮前町

米山 房子

夏盛んホースの先の土黒し

草苳かぶりりし被かぶりはずして空あおぐ

草取りや勲章となる腕湿布

凌霄の咲き疲れきて夕の空

夏帽子風をまとひて船の上

夾竹桃排ガスを吸ひて鮮やかに

手には地凶甲斐の酒蔵秋惜しむ

手の皴すくもは母の来歴葡萄摘む

滝音聞く千住博の絵画展

寂寂と坂続く村月渉る

月光の瀬鳴にまみれ村つつむ

坂道に敷かるる瀬音月の村

ゆるゆると三年坂ゆく白日傘

病室の窓に眩しき秋夕焼

湿原の河原撫子揺らす風

北新地区文化協会文学部

和 田 町 高 橋 昭 充

寒に入る盆地の深夜音も消え

突風にイチヨウ黄金の散り果てり

山青葉街はひねもす静まりぬ

和 田 町 辻 正 巳

若水をひと桶うちて庭清し

硝子戸へ薄き陽の射す冬至かな

春の草声も聞かれぬ通学路

和 田 町 高 橋 峯 子

萩ゆれて季節の移り恙がなく

新春や曾孫の歩みに勵まされ

散る桜胸にきざんで強く往き

和 田 町 辻 幸 子

冬天や和紙の白さの月残る

我が旅の明るき明日紅葉晴れ

傘まわし帰り行く子へ走り梅雨

緑が丘二丁目 小林 辰 男

可憐にも甘き匂ひや柚子の花

朝焼けが優雅に漂う冬の朝

釜無しの火振り漁や川涼み

緑が丘二丁目 清 水 ヨ シ 子

風しみる土手一面の曼珠沙華

子が五人炬燵槽が軋みけり

遠い日や指切りした十三夜

山城地区文化協会

上 町 梅 木 正 子

深みゆく金木犀の香を君に

稲架かけに群がる雀きりもなく

樅の木の根元探して鼠茸

小 瀬 町 松 本 宏 子

帰省して遺影に詫びる姉妹の手

新酒くむ小さき父の背息子と向ひ

衣被衣はぎ孫に食はせけり

上 町

どばし こうき

朝日地区文化協会

.....

蝸の呼び合うように鳴く日暮
郷よりの便り一行栗の飯
稲孕む風は優しと予後の母

上 町

坂本よし江

塩部三丁目

野村直高

沈む日にときめく光秋の暮

陽だまりに咲き揃いたる彼岸花

雨上り大根を蒔く靴のあと

中 町

二宮文子

朝日一丁目

戸澤茂紀

新涼や外気にふれて深呼吸

蠅螂や友と思うか肩に乗り

鈴虫や眠気を誘う夢の中

上 町

小林さち枝

塩部一丁目

板山武彦

うぶすなの杉の秀ま揺れる秋の風

鹿の声闇深まりし竹林

山雨に濡れつややかに葡萄熟る

上今井町

藤原一成

塩部一丁目

遠藤比登子

ひぐらしの声の重なる日暮かな

外科医院出でて蝸鳴きにけり

コスモスや富士全容を見る峠

採血の針の切っ先そぞろ寒

稲妻や空缶蹴って猫走る

遠嶺けぶりて秋冷の杉木立

留守宅の朽ちた垣間に彼岸花

枝のばし古刹に寄りそう紅葉かな

敬老日祖父母の姿描きし孫

寒早あしうらダムの底ひに眠る家

ぐっすりと足裏の白き日焼の子

吾子の手に秋の七草あふれたる

つちふるや日輪遠く翳りたる

秋澄みて盆地見渡す観世音

きのうけふ薄れる記憶いわし雲

塩部四丁目

高木 ふう子

読書には字びの糧や老の松

戦災忌いしづえ地蔵鶴百羽

山程の話を聞きし除夜の亡母はは

塩部四丁目

高木 常雄

大王松家の宝と位置付けて

苗売りに昔馴染の声聞けり

墓地清掃朱文字くつきり秋彼岸

大里地区文化協会

宮原町

功刀 佳秋

秋あかね築百年のレストラン

蛸やひとしきり鳴く通夜の刻

空のあを薄きトーンの今朝の秋

宮原町

比田井 文ゑ

あるじ無き三和土小暗きちちろ虫

見渡せば粧ほひ初む山の壁

修復の縄文の土器残暑なほ

大津町

芹澤 千束

筈に摘まみし貝割菜みずみずし

鎌研ぎて見上げたる空秋茜

茸採り火遠理祠に会釈して

上町

小林 さち枝

糸瓜忌やコーヒーの味ほろにがし

辿り来て赤そばの花真盛り

更けてなほ剥落土蔵虫すだく

大里町

相澤 澄江

彼岸花紅蓮や魂魄とどまりて

秋風や外燈灯り星の路

烏瓜したり顔して藪の中

貢川地区文化協会

富竹一丁目

安部 龍太

こきりこを回し打つ音山は冬

積もる想ひを告げらるる十二月

つちふるやうみしかのツノ伸びてゐて

富竹二丁目 大内恭子

還らざる日の面影や月見草

老残のひかり池面に枯蓮

いのちあらば余生にあらずつくつくし

富竹二丁目 望月 貴美子

枯木立かすかな風に聞く挽歌

まだ癒えぬ被災地照らす寒の月

漁火を遠く眺めぬ秋の声

富竹二丁目 石川 勝美

名刹や法師蟬鳴き山光る

茜雲枯蓮揺るる寺の池

高原の空を映して秋の水

富竹三丁目 石井 弘造

つと戦禍病禍災禍や法師蟬

一二三富士北間の冬めける

名を一字授かり喜寿や秋彼岸

国母地区文化協会

国母三丁目 渡辺 優

蝶番合はぬ裏木戸菜種梅雨

家業継ぐ女杜氏の寒造

切り株に腰落とす間や法師蟬

国母二丁目 斉藤 義治

あじさゐの一際目立つ朝の庭

湯上りの甚平羽織り飲むビール

咲き競ふ武田神社の蓮の花

雨宮 守男

国母二丁目

甚平を着込みへソ出す決たらし

天井に張りつく守宮蹴り寄る

高畑三丁目 安藤 精一

閑かさや臀咄の蜻蛉沼の上

秋風や仲よし葱の二籠り

灼けた日の還らぬドーム鎮魂歌

国母三丁目

深沢明美

国母三丁目

杉田主

底冷えの山里響く木魚かな

芋幹の母の巻寿司懐しや

音羽山尼寺盛る雛流し

国母三丁目

茂野隆晴

葱坊主頭揃えて並び起つ

日照り雨車に逃げる野良仕事

雨蛙お前の武器はオシッコか

国母三丁目

内田厚美

「あばよまた」去り行く君に秋時雨

草枕仰ぐ夜空に秋の月

稲妻の閃く小窓四畳半

国母三丁目

小林真弓

富士を背に茅の輪くぐりの親子連れ

湯けむりに紅葉ひとひら秘境宿

紅筆で描く唇石榴色

国母三丁目

稲葉美紀

飛び交うや誰を探すか赤蜻蛉

浴して枕元照らす月明り

秋気澄む子供ら集う音楽館

何もなき時間の幸せ夏の朝

それぞれの個性が口に尺花火

大屋根を縄で支えて飛驒の夏

国母三丁目

藤原時男

晩年は追憶数多星月夜

現世や逝くに任せし流れ星

千人の針も空しや敗戦忌

琢美地区文化協会

.....

朝氣一丁目

野沢勲

春恨や深夜地震月おぼろ

蜥蜴の子石にしがみて光吸ふ

善光寺御開帳柱人の並

城東二丁目

藤原行子

水垢離の声滝壺に吸はれゆく

眼裏の閃光消えず終戦日

朱の残る縄文の椀稲の秋

城東三丁目

望月映子

甲斐市

長田佳子

車椅子押し古の薔薇街道

丹後浜クラウンフレッシュ背に舞妓

最前列イルカのショウの日照り雨

芋づるを手操れば一つ見つけたり
柿の実に背伸びしてみる男の子
道すがら句を詠む人に秋の風

富士見二丁目

小宮山栄子

リズム良く包丁研ぎて秋の声

迎火に十一人が手を合わせ

傘寿なり三寒四温通りぬけ

富士見二丁目

中嶋海音

秋日和友より届く一筆画

秋の空バイク飛ばして田舎道

薫風や窓開け放つティータイム

大和町

有泉和恵

富士見二丁目

成島玖美子

山の背を覆ふ鬣裸木かな

ご褒美のやうな小春の一日かな

亡き母に想ひ誘なふ秋海棠

音羽町

岡田宣彦

美咲二丁目

糠信 富貴子

万緑を越えて地蔵のおベリスク

漁火を散らして探る鵜舟かな

木曾駒ヶ岳を目指し紅葉のカール行く

待つ人の高くかざすや白日傘
人けない門前横は苔の花

秋立ちぬ道路工事の予定表

千塚地区文化協会

富士見二丁目

日原慶子

海沿ひのパン屋に煙秋澄めり

双子には二つの願ひ流れ星

ゆつくりと母とめぐりし菊花展

千塚四丁目

日向鏡子

法要の終りて仰ぐいわし雲

逝く友に労ひかけて星流る

沐浴し眠る赤子や夏の午後

羽黒地区文化協会

山宮町

山下知

蓑虫の下がれる枝の切りがたく

いもうとを偲ぶ読経に蟬時雨

鐘の音に犬歌ひだす鱗雲

総 評

令和四年度第四十八回甲府市民文化祭文学部俳句の部には、十一の参加団体がありました。内訳は、専門部二、地区文化協会九、合計参加人数は七十名、句数は二百十句、そのうち展示は七十名七十句です。

今年も、皆さんが身近生活に細やかな目配りや気配りを行うことで得られたささやかな感動を的確に表現した数多くの作品に接することができました。その俳句を拝見し、皆さんが更にステップアップした句作りをするための十の留意点を掲げました。

①たくさん作って、たくさん捨てる、②なんでも俳句にしてみよう、③発見のある句を作る、④類想類句を恐れない、⑤独りよがりの句を避ける、⑥定期的に作って投句する、⑦句会で切磋琢磨する、⑧努力し続ける、⑨良い句ができなくても悲観しない、⑩愛唱句をもち、それを模範として自分なりの思いを込めて作る。以上です。ぜひ参考にされて、日々の句作りに生かしていただければ幸いです。

選奨委員二名によって、文化祭賞一、奨励賞一、文学部長賞六を選考しました。

文化祭賞

○ゆるゆると三年坂ゆく白日傘

米山 房子（図書館句会「翡翠」）

心を落ち着かせ、ゆつたりと三年坂を上っていきます。手には白日傘。その傘の白さが目にも鮮やかで涼しさを表現します。作者は暑さをしばし忘れ、周囲の景色に感動し、喜びもひとしおです。まるで、京都を舞台に撮影をしている映画のワンシーンのようです。一読して、清浄な気持ちにさせてくれる句です。

奨励賞

○晩年は追憶数多星月夜

藤原 時男（国母地区文化協会）

星月夜は秋の季語。夜空の星の明るさが月夜のように明るいと、情景を表しています。作者は人生の晩年を迎えて、それまでの人生のさまざまな場面を追憶しています。見上げる星月夜の輝きが作者の思いを静かに清らかに照らし出しています。

文学部長賞

○採血の針の切っ先そぞろ寒

遠藤比登子（朝日地区文化協会）

採血は、ちくつとした痛みを伴うため、一大決心が必要です。注射針の銀の先端を見ただけでどきどきしてきて、心が不安定になります。何となく寒さを覚える瞬間です。しかし、無事に採血を済ますことができ、ほつとしたことと思います。

○水垢離の声滝壺に吸はれゆく

藤原 行子（琢美地区文化協会）

夏、山中の滝に身を打たせ修行する様子を描いています。祈りの声が、滝壺へ落ちる滝の水音に消えていきます。神々しい水垢離の情景が鮮明に表現されています。

○秋日和友より届く一筆画

青柳美代子（千塚地区文化協会）

友達から届いた一筆画には、秋の草花が描かれているのかもしれませんが。きつと季節の移ろいに合わせて絵が届くのでしょうか。穏やかに晴れた秋の日をいっばい浴びながら、友人の情愛をひしひしと感じています。

○秋あかね築百年のレストラン

功刀 佳秋（大里地区文化協会）

秋あかねは、赤とんぼのこと。百年前に建てられた洒落たレストランの辺りを舞っています。秋晴れの下、無数の赤とんぼが築百年をお祝いするかのようになり、また、これからもお店が繁盛するよう祈るかのようになっています。こんなレストランで食事をしてみたいものです。

○てびねりの緋色のゆのみ秋近し

中嶋 海音（千塚地区文化協会）

小学校六年生の作品です。テーブルの上で粘土をこねて作るてびねりは、オリジナルな作品を生み出すことができます。出来上がった緋色の湯飲みを手にして、私を間近かに感じたのです。緋色は、黄色味のある鮮やかな赤です。紅葉をイメージさせます。猛暑にうんざりしながら、秋の到来を待ち望む思いが込められた句です。

○冬天や和紙の白さの月残る

辻 幸子（北新地区文化協会）

冴え渡る冬の空に白い月が上っています。和紙の白さという比喩が、趣深く冬の月を描いています。その月が、澄み切った冬の夜空の冷たさや清らかさを一層鋭く表現し、引き出しています。

選奨委員

”

河野一郎
井上康明

川柳の部

川柳枝の会

湯田二丁目

渡辺 さちえ

読破する最後しりたい上下巻

へその緒は母になった日記念品

愚妻でも夫引き立てるカスミ草

善光寺二丁目

小林 誠

乗るかえを外国人に教えられ

降る雪にすべるのいやと受験生

コロナ君僕はあなたが嫌い

朝気二丁目

木村 源子

けとばしたように散らん猛暑の日

かいた欲捨て場所なんてありません

言うまいと思えど急す一言よ

朝気二丁目

保坂 幸江

反省をつづら折りして畳む夜

会うたびに人格を知る頼もしさ

嘯いた演説聞いて投票所

川柳甲斐野社

富士見二丁目

饗場 導代

夢がある喜寿の今でも前を向く

消しゴムに勝てない悔しペンの先

度忘れと思いたい喜寿二つ三つ

湯村二丁目

青柳 中子

オルゴール音色が戻す幼き日

才能の欠片探して学ぶ道

器量より気立て良くして生きていく

下河原二丁目

岩本 智恵子

この猛暑未だ参れぬ兄の墓

爪切つてなかなか抜けぬ仕付け糸

ランドセル待つ入学へ指を折る

千塚二丁目

石橋 恵美子

幸せの時には見えぬ人の恩

有頂天心の鍵を置き忘れ

失敗の苦さに人は育てられ

湯村二丁目

猪股 勉

城東二丁目

佐野 越子

忘れた句何時か浮かんでまた会える

哀史積む古城煌煌照らす月

国逃れ願う平和の遠き道

意気の合う漁師父子の瓜二つ

人間のエゴが地球を壊す罪

口論が変わり戦争研究所

相生二丁目

大久保 健三

相生二丁目

中井 久子

国葬で国の品格比較され

数えるとむなしくなるね歳と金

足腰の動く間に旅に出る

目に見えぬコロナ怖くてひきこもる

川と共文明開き国作り

夜空見て昼のくよくよ忘れられ

下飯田二丁目

風間 なごみ

塩部四丁目

清水 雅子

躓いた小石に知恵を授けられ

一人秋虫の音色を句に込める

屋根のないお風呂で星をかき集め

胸の奥に一人持つのは重すぎる

泣き言は止そう戻らぬことばかり

川岸で宵待ち草と語る夜

下石田二丁目

小林 信二郎

下飯田二丁目

下笹 黄童

驕るなよ銃を持つのはヒト科だけ

好季節句が山盛り秋の膳

秋が来て無敵な卵かけご飯

歳重ね互い労わる夫婦綱

八つ転びもう助けないダルマさん

諦めを奪い起して灯を点す

東光寺二丁目

坂田 よし江

国母五丁目

土屋 美代子

詩を追うわたしと歩く辞書がある

断捨離を思い切れない衣装箱

お茶だけで別れた母と言う理性

まさかでしょホールインワン空は澄み

反省の余地を残して子を論し

いい笑顔寂聴さんの死を悼む

相生二丁目

中村 あき

母の瞳にさくら満開娘の門出

持ち寄った汗が大河になる船出

躓いた石が笑った甘い理由

下飯田四丁目

深澤 弘

点滴へ老いの命がぶらさがり

栄冠へひたすら従いて来た内助

八十の坂越える夫婦にある未来

富竹二丁目

望月 貴美子

晩学に興味の仲間という宝

一徹を通した父の反戦歌

少年の拡げる夢は無量大

相生二丁目

向山 てる子

戦争はもうやめてねと叫びたい

王女さま皆に愛され天国へ

台風一過雲隠れして富士見えぬ

横根町

若林 寿美子

今年こそ出来るといいね文化祭

岡島よ灯を消さないで頑張つて

プーチンに見せたい信子反戦歌

朝日地区文化協会

塩部二丁目

板山 和子

吾が孫は宿題あとでメール先き

すもうとるながらスマホで電柱と

片足をあげてよろめき老を知る

池田地区文化協会

上石田二丁目

秋山 しょう子

青信号渡り切れるか膝小僧

一本気爺の押しつけ無駄がない

我が道に父の一言耐えた日々

国母五丁目

石倉 正身

鏡見て教えてもらおう背の曲がり

世の中はお金と運がおもてうら

同じ趣味友と絆を太くする

中村町 岡本 咏子

捕虜になり頼れる父が踏む祖国

遠い日の祖父のおしゃれをまた偲び

親になり息子と孫の初握手

古府中町 長田 美智子

正常です機械に言われ入る店

握手なく肘つき合わす大臣ら

ああ極楽手足をのばしお湯の中

塩部四丁目 清水 雅子

病む夫の車椅子押すただ前へ

ひとりには胸の荷物は重すぎる

入院の夫へ絆の手紙書く

下飯田二丁目 下笹 黄童

明日に向けやがて咲かせる種を蒔く

錆かけた歯車磨き再稼働

人生に感慨を貰う趣味の道

下飯田四丁目 深澤 弘

まだ若い若さよ幸を掴み取れ

ふる里へ心の憂さを捨てに行く

輝ける未来はきつと俺のもの

春日地区文化協会

丸の内二丁目 柄沢 眞

冬の風呂四十三度で大あくび

四ツ葉マーク優しさ受けて片手上げ

三高の男でなくて今暮らす

丸の内二丁目 井上 みや子

物価高プランター野菜を食べる

好きな歌友と歌った五十年

おんぶした孫に今ではおぶわれる

丸の内三丁目 芦沢 すみ子

亡き母の遺品整理で時間が止り

棚整理彼の友レター青春懐しく

元気けー中学友の声高く

丸の内二丁目 信田 悦子

何やかや手ばかりかゝる九十五才か

野の花の色よく香るやすらぎの家

朝六時ラジオ背負って舞鶴の庭

丸の内二丁目 松田 宏

もう無理だ売り手買い手が「ね」を上げる
持ち出した缶切りテレカどう使う
見たくない花火以外の落下傘

丸の内二丁目 浅川 健獅

へボ将棋角と飛車盤外に
高熱であの世この世と行き来する
桜より桃の花濃く美しい

丸の内二丁目 徳満 晃

傘いらず青葉若葉の散歩道
ついに来た隣組にも感染者
年とると犬の散歩も命がけ

丸の内二丁目 飯沼 明

さもあらん何んぼのものか人の世に
感謝などされる覚えのないセール
家がない今日も歩けばまた一軒

丸の内二丁目 今村 好江

コロナ禍は忍耐力を学ぶとき
からっ風おぼえていたね甲斐の里
芋ダンゴ食みつつあおぐ澄んだ月

丸の内二丁目 山本 登志恵

震災の日々重ね見るウクライナ
物価高高級品は目の保養
DNA親子孫までほっこりと

中央二丁目 清水 明

うぶ声で命エンジン回り出す
母の花冥途の光に凜と咲く
足に腰願うのぞみはお遍路へ

丸の内二丁目 茅野 三千代

自撮りしてアップの顔に凍りつき
除夜の鐘ゆく年くる年ウィズコロナ
散歩中またも見つけた空き店舗

貢川地区文化協会

富竹二丁目 望月 ふみ江

やり切った結弦の勇姿世界一
庭採れの野菜の味は格別だ
槌音の響く我が町明日に向く

富竹二丁目 石川勝美

夕陽背に思い出語る散歩道

月捕れと泣く子に悩む親心

幸せを掴めと曾孫の手を握り

富竹二丁目 高野智恵子

信濃路を一茶の心で旅をする

富もなし財もなければ遺書もなし

老眼に変えてもかすむ説明書

琢美地区文化協会

城東二丁目 佐野越子

燃えつきるまでの執念持ちつゞけ

いい夢を見たくて派手なパジャマ着る

被核論日本は声を大にする

城東二丁目 星野雅子

一度しかない人生をどう過ごす

眠れない夜はいつでも深夜便

いつの世もキツネとタヌキの化かし合い

城東二丁目 丸山通家

マスクして挨拶するも誰だっけ

愛犬の命日だけは覚えてる

孫を背にオリオン探す星月夜

城東二丁目 巽利夫

おためしのサブリー一番夕の酒

春を待つ蕾が画く白い地図

六十年二人でしぼる汗に生き

城東二丁目 望月秀子

引き算の得意な姉は年を退く

高揚のチャペルロードの孫たかし(崇)

六十分スマホで近況引きこもり

羽黒地区文化協会

山宮町 寺本重加

無器用も汗と涙で花咲かせ

文明も未知なる敵と対峙する

答弁の真摯丁寧霧の中

朝氣二丁目

矢野勝美

STOP the WAR 対話で果せ世界晴れ
語り部の聞かせどころが胸を打つ
振袖の洪水あでやか色に酔う

賽銭のうしろ姿にある願い

日に何度血圧計と勝負する

品の良さ女盛りを過ぎてなお

朝氣二丁目

中澤初枝

生き延びて母に感謝の空襲忌

春光が眩しく見える花屋さん

悲喜ありてその度歌に励まされ

朝氣二丁目

高石昭三

庭の花綺麗に咲かす美人ママ

八十路とて消せぬ女の薄化粧

朝まだき登る山頂弾む息

笛吹市

沢登清峰

人類にや当て嵌まらない進化論

その昔子は鎧と云われてた

スローガンだけで中味の無い政治

総 評

会員の高齢化が進み、作品が少ない文化祭でした。専門部二団体、二二三名、六十九句、地区文協七地区、三十三名、九十九句、合計一六八句の中より、奨励賞二名、文学部賞七名を選出しました。受賞致しました作品の講評を記し、ご協力下さいました皆様に心より感謝申し上げます。

奨励賞

○ 晩学に興味の仲間という宝

望月貴美子

長く人生を歩むと友達は沢山います。そんな中で文芸にいそしむ、大勢の同志を得、励まし合いながらの仲間こそ真の宝と言いつける。文芸を志した幸運が見事に表現された一句。

○ 愚妻でも夫引き立てるカスミ草

渡辺さちえ

妻の謙虚さを上手に詠んだ作品で大いに共感を得られます。幸せな夫が垣間見え微笑ましい。川柳の滑稽さが秀でてる作品です。

文学部賞

○ 幸せな時には見えぬ人の恩

石橋恵美子

躓いた時に温かく支えてくれる人に会い、力強く立ち直れる。その時の恩を一生抱いて生きよう。幸せの暮らしの中では見えぬ人間模様。

○ 賽銭のうしろ姿にある願い

矢野 勝美

神社に詣でる人それぞれの様子を、後ろ姿で表現しています。幸多かれと祈る様に自分を重ねて見えています。

○ 高熱であの世この世を行き来する

浅川 健獅

高熱を発した様子が手に取るように解らせます。一瞬苦しんだ様を面白可笑しく見事に表現しています。

○ 青信号渡り切れるか膝小僧

秋山しよう子

青に変わった信号、足の痛みを抱き重い足どりで一心に渡り始める。痛む膝小僧に喝を入れながら。

○ 引き算が得意な姉は年を退く

望月 秀子

誕生日が巡るたび、一つ年を積み抵抗感、引き算が得意な姉にあやかり私もこれからはそんな生き方をしよう。

○ 夕陽背に思い出語る散歩道

石川 勝美

夫を連れ添っての夕方の散歩、結婚、育児と思い出は尽きない。残された人生を二人元気で生きて行こうと歩を進める。

○ 燃えつきるまでの執念持ちつづけ

佐野 越子

大正、昭和、平成と生き抜きまだまだ若さは抱いている。夢の百歳も遠くない。執念を燃やしこの令和を大事に生き抜こう。

選奨委員

深澤

大森

弘 隆

展示・発表の部

第四十八回 甲府市民文化祭を終えて

華道部門 小林 明 美

今年度の市民文化祭は三年ぶりの開催ということで、楽しみの中にも不安もあり、展示スペースの設営に関しては、台の高さ、背面の高さ、貼る布等、前回の記憶を出し合い、会場での確認をしながら進めてきました。

華道部の所属流派が十二となり、どのように展示スペースを使えば、より綺麗な展示ができるかと、相談を重ね、各流派二名から三名で、四メートルのスペースに個々でも合作でも、それぞれの流派にお任せして展示を行うことになりました。また、地区の方々にも、できるだけ多くの出版をお願いし、六地区十四瓶の作品をとめてゆったりとしたスペースで展示することができました。秋の花材をふんだんに使い、それぞれ思いを込めて作りあげた作品が並び、合作の大作あり、個々の作品ありと、見応えのある素晴らしい展示となりました。

これからさらに文化祭を盛り上げていくためにも、地区文協の出瓶数が増えることを期待しています。

ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございます。





文化協会の原点

工芸部門 石川 顕

新型コロナウイルスにより三年ぶりの開催でしたが、いつも通りのすばらしい作品展示ができ、二年間の空白を感じさせない文化祭となりました。

ただ、気になったのは参加される方が年々減っているのではないかということです。工芸部に関して言えば、十年ほど前に比べて団体数は半数以下になっております。文化協会全体としてはどうなのでしょう。

文化協会創立の頃に比べると、世の中が大きく変わってきています。昔はなかったような新しい分野で活動している方々もたくさんいらっしゃいます。

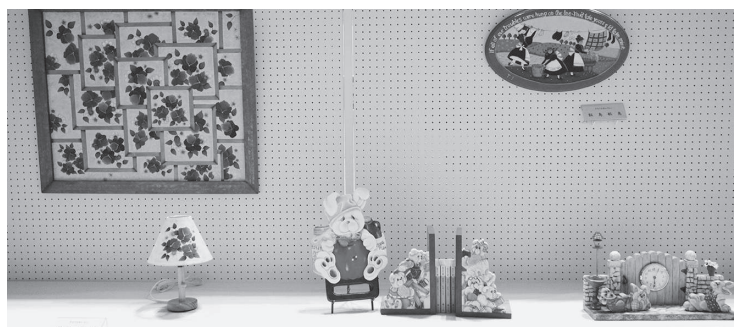
これまでの伝統や歴史ももちろん大切ですが、時代に合わせて変えるべきことは変えていくことも必要です。

市民のだれもが身近に「文化」を感じて、気軽に参加できるようなれば、会員数も増え活動の輪も広がるのではないのでしょうか。

甲府市文化協会の規約には、「…自主的な文化活動を助長し、郷土文化の振興と甲府市の文化水準の向上を目的とする」とあります。



もう一度原点に戻って考えてみたいと思います。



文化祭を終えて

写真部門 広瀬 修

天候に恵まれ、今回こそはとみんなが待っていた第四十八回甲府市民文化祭が開催されました。前回の文化祭ではマスクをすることなく開催出来ましたが、今回はマスク着用が必要で息苦しいものがありました。展示は三日間でしたが、会場へ入るとこれこそと思いを込めた作品ばかりです。私が特に目をひきつけられたのは華道部の作品で、華やかで、ボリウムがあり枝を大きく伸ばした見事な出来栄で頑張りが感じられました。

写真撮影のため文学部の展示を拝見しましたが、多くの作品が一句ごとに味わいのある言葉があり、しばし立ち止まりました。また、茶道部は広いイベントホールを十分に使い、ゆったりした中に会員の美しい着物の立ち振る舞いが華やかな会場を作り上げていました。

舞踊部では各会派と地区文協の会員が入れ代わりで美しい舞台が輝いていました。

邦楽部の舞台では幼い女の子の三味線演奏が見事でした。吟剣詩舞道部も小学生位の児童が精一杯の声を出して見事な吟詠を披露していました。



今回の文化祭では邦楽部と吟剣詩舞道部の若い人が参加しているのを見ましたが、文化協会に更に多くの若者の参加があればと思いました。

写真部では、女性の新人が前回の文化祭より多く入賞しました。これからも更に多くの新人に入賞して欲しいと思います。

来年の文化祭も更に活性化するように頑張りましょう。



墨の香り

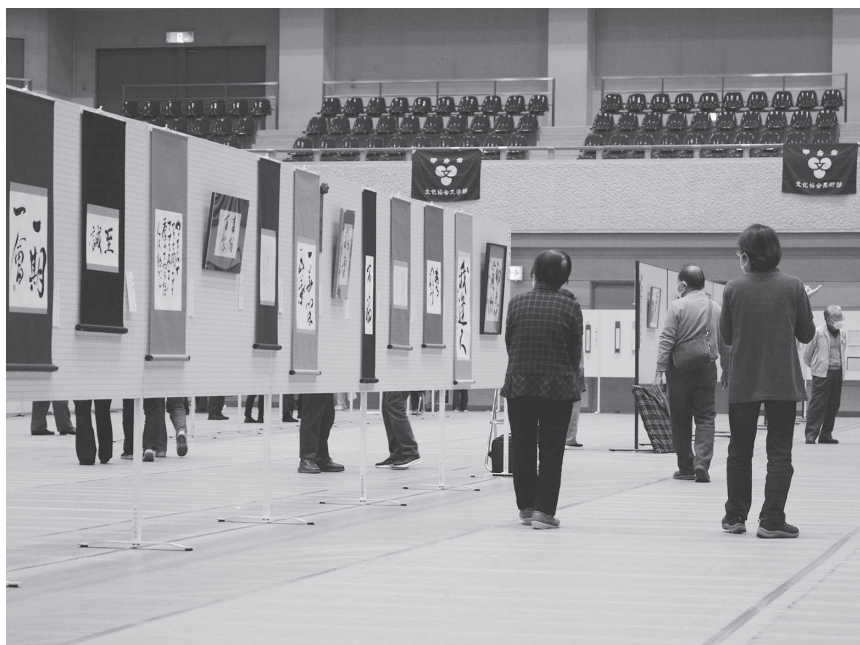
書道部門 矢崎美咲

菊咲く季節、三年ぶりに文化祭が開催され、はじめは不安でしたが、作品が飾られた時は「ああ、よかったなあ。」と思いました。

書道部は専門部の二団体が退会し、二団体が入会しました。地区文化協会は八地区中止、また継続困難等あり、七地区の参加となりました。合計出品数123点でした。また以前盆栽部とコラボして新しい空間がありました。今年は作品数減少によりありませんでした。

参加申し込み書より作品の大きさを見て、各団体のスペースを考えるのですが、飾る範囲内での展示は皆様上手で、良い展示となりました。作品の大きさは規定通りでした。ただ軸作品にすると長くなり、気を付けたいと思います。名票を貼る釘が落ちやすく、次回までの課題となりました。

書は漢字・かな・調和体・刻字・篆刻(印)等多部門あり、家で過ごし一人のできるいいものですので、やってみませんか。また文化祭は絵・書・写真・工芸・文芸・水石・盆栽等一堂に会し楽しい空間でした。





第四十八回 市民文化祭

水石部門 水上 強

本年度の文化祭も、出品者の皆さんのご協力により、無事終了することができました。ご協力ありがとうございました。

今回の出品数は、二十二点で前回と比較すると、六十三パーセントの出品となり、「コロナ」による二年間の中継で大きく減少いたしました。

この原因は、会員の高齢化及び死亡等によるもの、また、新規加入者の減少（皆無に等しい）。特に地区文化協会水石部会員の減少が目立っています。

良かった点は、この水石展示に関東近県の愛石家が、前回より多数訪れ鑑賞されて、相互の交流の場となったことです。

水石部の受賞者は、次のとおりです。

文化祭賞 山梨県愛石会 大野浩伸

奨励賞 琢美文化協会 中澤 健

最後に、前回「文芸こうふ28号」で、水石部の存続について記しましたが、会員の減少は予想をはるかに上回っており、対策は急務とされ、関係団体との検討会等の開催を

計画し、来年度に向けてより充実した水石部を目ざしたいと思っております。





市民文化祭に寄せて

美術部門 古川 みや子

第四十八回甲府市民文化祭を三年ぶりに開催することが出来ました。出品者の皆様には、日々精力的な作品創りに取り組まれたことと思います。

今回は新しいグループも入会していただき、無事準備が出来たことにホッといたしました。三日間皆様のご協力のもと、つつがなく、かつ盛況のうちに終了することが出来ましたことに感謝申し上げます。

初日は信玄公祭りと重なり、入場者は少なく感じました。出品作品も前回より少なく、全般的に小さめでした。従って、絵と絵の間隔を広く取ることが出来たため、観賞しやすかったのではないのでしょうか。

入場者の中には展示作品について「どの様な手法で描いたのですか」との質問を数人の方から頂き、熱心に鑑賞してくださっているのだなと感心いたしました。

美術部の皆様には、これからも「今を生きる」の精神で、絵画作成のプロセスを生活のエネルギー源として楽しみながら継続して、次回文化祭に向けてステップアップしていただきたいと思っております。





市民文化祭を終えて

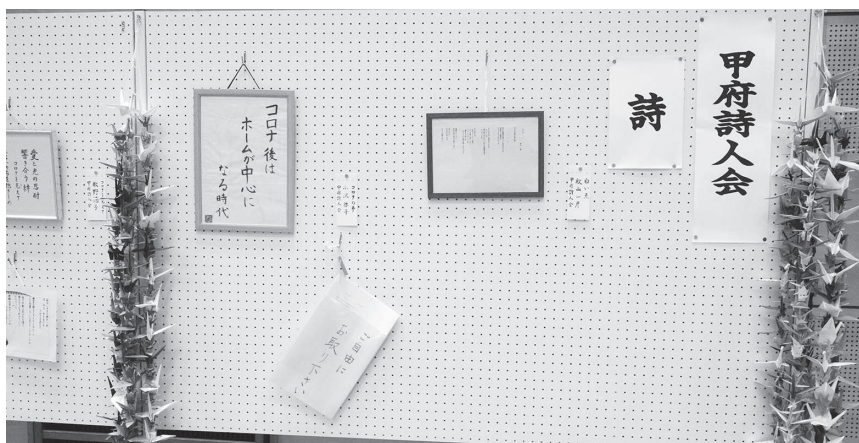
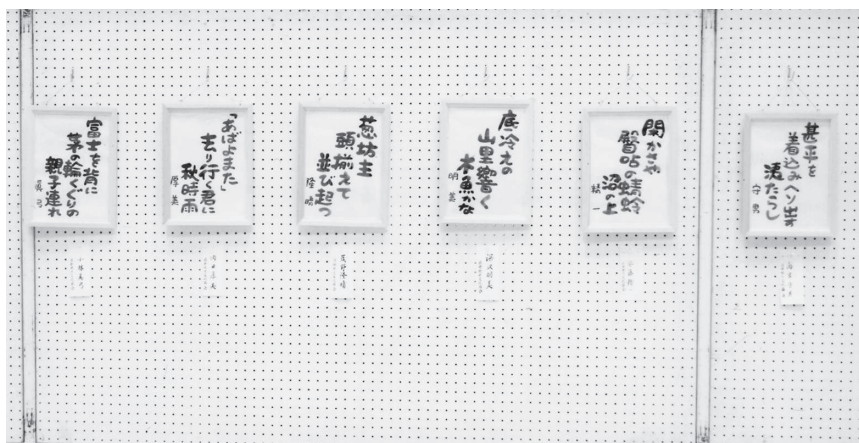
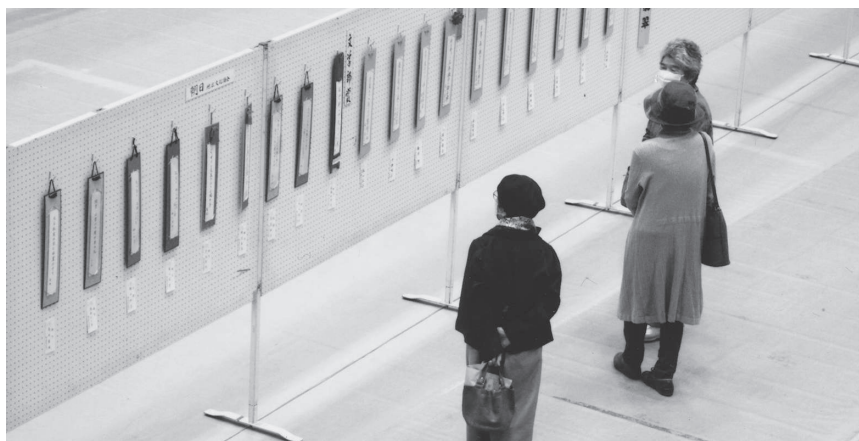
文学部門 深澤 弘

三年振りの文化祭、ついつい力が入りました。専門部、地区文化協会共々持てる力を合わせ、力作を揃えました。鑑賞者の皆様がじっくり味わう事ができ、一つの誇りに思っております。喜怒哀楽を円熟味のある作風にまとめた手腕、積年の成せる技と胸を張って言い切れます。花鳥風月、社会も日々変遷しつつあります。その様を詠む心地良さが、長く各分野で筆を走らせませす。熟年の方の作品には、人生が滲み出ていて、さすがと感嘆いたします。一方若い方々の作品は、自由闊達に表現し見事でした。その中で小学六年生が詠んだ俳句を紹介いたします。

「てびねりの緋色のゆのみ秋近し」中嶋海音^{みおん}（文学部賞）

作品が年々減少し、スペースを埋める苦勞を余儀なくされました。これからは、各学校単位で作品を募り、展示すると底辺が広がりますので、呼び掛けると良いと痛感いたしました。最終日の文学部賞授与で文化祭を締め括りました。ご協力ありがとうございます。感謝です。





盆栽部展示を終えて

盆栽部門 小泉 泉

第四十八回甲府市民文化祭が「次世代へ、輝く文化、引き継ごう」のテーマで三年ぶりに開催されました。期間中はコロナ感染対策の徹底で参加関係者には多少の不安と困難がありました。無事行事が終了し、安らぎと明日への勇気が湧き出てきました。盆栽部では大会参加会員が減少傾向でしたが、出展作品は重厚なものも多く、会員の皆様が日頃の研鑽を積み重ねてこられた表れと思います。

文化祭賞の杏間妙子様作品は、秋にもかかわらず苔の中の色々なすみれが、生々として並び競花、素晴らしく見事でした。

文化祭奨励賞の樋川直哉様の作品は、日当りの良い庭で大鉢に日本種、外国種が咲き乱れた様子がうかがわれ、見応えがあり見事でした。

開催期間中多数の来館者があり、ご意見、御感想を頂く機会に恵まれ、会員一同更なる励みになり、精進して参りたいと思います。





二〇二二・市民文化祭から思うこと。

演劇部門 渡 辺 政 幸

演劇部ステージ——キャスト・スタッフの皆様お疲れさまでした。

二〇二二年の演劇部発表会は、秋の爽やかな陽ざしの中、開会式と共に芸術ホールで幕を開ける事が出来ました。あらためて、出演者並びに、ご協力を頂きました皆様方に、お礼を申し上げます。そして、会場にお越しくださった皆様、最後まで拍手とお声掛けを頂き厚くお礼を申し上げます。

市民文化祭の演劇部ステージは、演劇と朗読とマジックの発表の舞台として構成されています。

女性を中心となつての朗読グループや、お話の会。身体表現を目指す物語グループ。そして、地域の中で七十年近く演劇活動が続いている「劇団やまなみ」。それぞれの個性を持った多様なグループの皆さんが、お互いの活動を尊重しあい、発表の場として、今回のステージを楽しく盛り上げて頂いたことに、心よりお礼を申し上げます。

今年の文化祭は（コロナ明け……？）と、云うイメージもあり、グループの練習や、出演者参加者の調整に苦労さ

れたと云う、お話も耳にしています……。

そこで「さて、来年は？」と、云うことになりましたが……。

中々、地域の若者文化は育たず、感染症もおっかなびっくりのこの時代。でも、来年も市民文化祭はやりましょう!!

舞台と客席が一緒に楽しめる、気軽なお祭りイベントとして、是非、皆さんのご参加下をご予定ください。



第四十八回 甲府市民文化祭を終えて

合唱部門 岡 田 恭 子

三年ぶりに開催された甲府市民文化祭。合唱部の発表は十一月十二日(土)文化祭の最終日に、甲府市総合市民会館芸術ホールに於いて行われました。

コロナ禍にあつて練習場所の確保や会員の高齢化などにも直面し、合唱活動は困難な時を過ぎました。しかし、関係者の皆さまのご理解とご尽力により、感染防止のガイドラインに沿って文化祭の開催となったことは、大きな喜びでした。

発表にあたって最も気を付けたことは、対人距離と換気です。マスク着用でも1m、マスクなしでは2mの距離をとるというガイドラインに沿って、ステージ上の立ち位置を決めました。また、これまでは入退場を同時に行っていました。前回の団体が退場した後、次に次の団体が入場することになりました。リハーサルは、換気が十分できる格技場で行い、着替えは原則行わないこととしました。

様々な制約の中でも、どの団体も発表の時を迎えた喜び、共に音楽を楽しむ幸せを味わいながら精一杯の発表をすることができました。





音楽の玉手箱

合奏部門 遠山 忍

今年の合奏部は新規加入もあり、二十五団体六百二十人が所属する大きな部になりました。

十一月三日の市民文化祭では、このうち十七団体、総勢二百六十二人が出演し、三年ぶりのステージには、かつてない高揚感が漂っていました。

どの団体も、コロナ禍による活動自粛により、発表の場が制限されてきただけに、会場に響く楽器の音色は如魚得水そのものでした。

残念なことは、客席に空席が目立つことです。

演奏参加者も、市民文化祭となると集客に無頓着なのは、主管者としても悩ましい問題です。

文化祭は、弦楽、吹奏楽、邦楽、マンドリン、ウクレレ、オカリナ、ハーモニカ、ハンドベルなど多種多様な楽器が集結することから、音楽の玉手箱のような贅沢な舞台です。





文化祭での絆

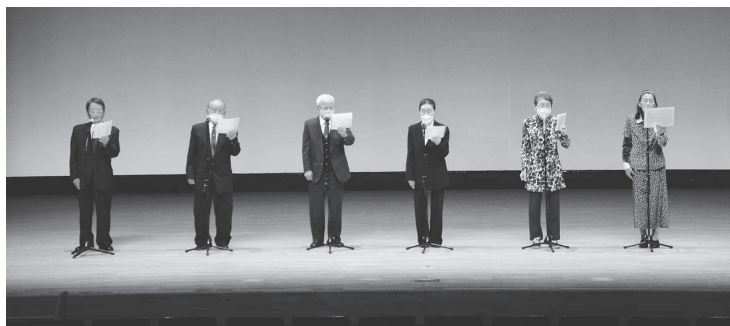
吟剣詩舞道部門 光 本 繁 子

文化祭に参加して良かったです。役員の皆様の熱意、努力、知恵、行動のもと、何度も協議を重ね力を合わせ、一つに団結力で輪になって進めて出来るのが文化祭の意味があるのだと思いました。

独吟、合吟、詩舞、剣技、剣舞すべてそろっていました。全部が素晴らしく成功出来ました事は先生のご指導の賜物と皆様の努力が実ったものです。

構成吟「郷土の英雄武田信玄公を偲ぶ」は私にとって歴史の勉強にもなり大変有意義で感動しました。日本古来の吟剣詩舞道を後世に残さなければと強く感じた所存です。午後からの開演でしたので「こんにちは、お久しぶりお元気でしたか」と、「ありがとうございます。来年もまた元気で頑張ってお会いしましょう」を聞き稽古に精進しなければと勇気付けられました。「思いやり。支え合い。分かち合い。」この言葉を胸に刻み、一日一日を笑顔で自分が出来る事に励みたいです。文化祭実行委員の皆様へ感謝申し上げます。有難うございましたと、声を大にしてお伝えしたいです。





第四十八回 甲府市民文化祭大茶会

茶道部門 鶴 田 宗 慶

コロナ禍が続く中、表千家、裏千家、江戸千家、大日本茶道学会の四流派による大茶会が甲府市総合市民会館にて開催されました。三年振りということもあり、八〇〇名以上もの大勢のお客様で賑わいました。例年ですと和室はじめ室内で行なう茶会を、本年は感染対策上一階アリーナ並びに二階ホワイエというオープンスペース使用ということで設営に不安がありました。文化協会の方々のご協力により万全の設営をすることが出来ました。茶盃の消毒、銘々皿の菓子器の用意など例年に無い苦労もありましたが、各流派の趣向を凝らしたお茶席に、ご来場のお客様には大変喜んでいただけ、和やかな雰囲気の中無事に終了いたしました。長期化するコロナ禍で閉塞感が広がる中、疲れた心を少しでも癒していただけるよう今後も活動を続けていきたいと思えます。





文化祭に参加して思うこと

能楽部門 新津 久子

三年ぶりに開催されました能楽部の発表、コロナ禍での稽古は厳しく、会場の確保・練習は月二回から一回に減り、時には全くできなかった月もありました。マスク着用稽古は息苦しく声は小さくなり、満足のいくものではありませんでした。

今回は仇討ちの「小袖曾我」や、平安な世を祝福する「高砂」などの演目を発表しました。舞台上上がると日頃味わえない緊張感と、ちよっぴり晴れがましさも感じられて、今後の生き方に良い刺激となりました。

また、今後の課題も浮かび上がりました。能楽を多くの人に知って頂く方法は？広いホールでどのようにしたら声が届きやすくなるのか？などです。

古来から能はあまり広くない場所で演じられてきました。これからは会場に合った発表方法も考えたいと思いました。

今後も皆様の貴重なご意見に耳を傾け、楽しみながら古典芸能に触れ発展させていけたらと思っております。





第四十八回 市民文化祭を終えて

舞踊部門 保坂とみ子

コロナ禍が終息とはならない中、昨年、一昨年と中止となりましたが、今年は、少々不安の中ではありますが、市民文化祭が開催出来る事となり、皆様の想いが通じたと思っております。

十月三十日(日)舞踊部発表の日は、秋晴れの良い天気恵まれ、午前十時に開演となりました。地区文化協会、一般参加、舞踊部の一二八名により、文化祭に向けて練習に励んだ成果を二十四曲、発表しました。また、進行も順調に進み、フィナーレは、「甲府市の歌」を賑やかに踊り、会場から沢山の拍手をいただき終演となりました。

文化祭が無事終わることが出来ました事に感謝すると共に、次世代へ引き継がれていくことを願い、これからも皆様と共に精進してまいります。





三年ぶりの市民文化祭を終えて

邦楽部門 岡 安 喜和広

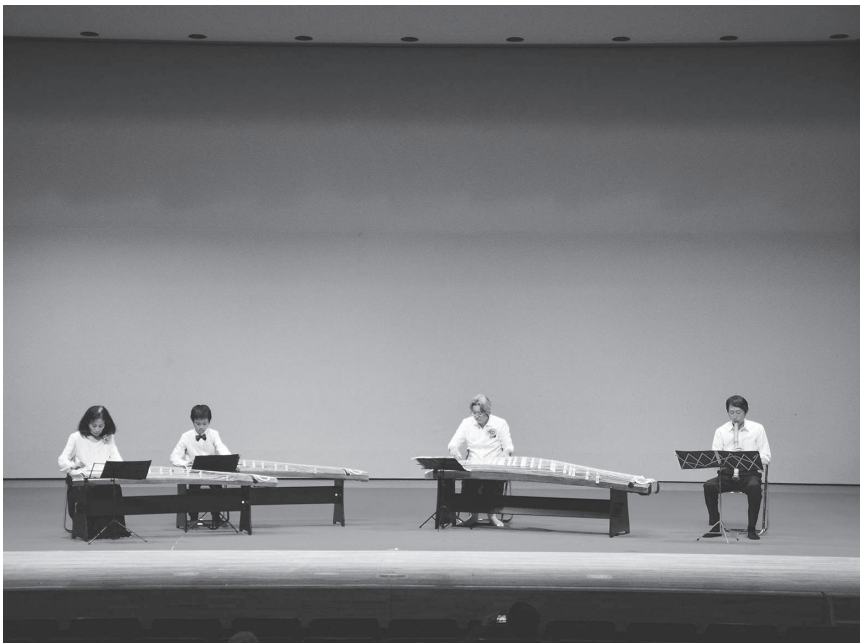
久しぶりの市民文化祭でしたが、邦楽部の発表当日は、甲府大好き祭りと同日に当り、お客様がさぞ少なくて、淋しい会になるのでは、と懸念しましたが、思いの外、多くの方々が聞きに来てくださって、ほっといたし、有難い事と思えました。

二年間の雌伏の後、久しぶりに舞台を努めさせていただき、気も晴々といたしました。

若い芽も着々と育ち、先生方のご努力も、成果を上げつつあり、伝統芸能の継承、育成という面も明るさを見る事が出来たと思います。

やはりコロナのせいで、やむなく出演をとり止められた御社中の方々は、本当に残念な事でございます。

今後のご活躍を心より期待いたしております。





第四十八回 市民文化祭を終えて

民謡部門 相 川 宝 楽

今年令和四年十一月六日甲府市総合市民会館の植栽も色づき、晴天の日に芸術ホールに於いて民謡部の発表会が開催されました。

今年久しぶりにコロナ禍の中を三年ぶりで行うことが出来ました。この流行病いの期間中は、すべての行事、各種イベントや福祉施設の訪問やら練習も俣ならず、悶々とした日々でした。社会の情勢も一変してしまい、年配者は高齢化を理由に止めてしまう方も多くいましたし、若者にしても種々の社会情勢で退会者が多数出たため、加入団体も休部となる会もあり、私たち民謡部も僅かに五団体、会員数も三十六人となりました。

その上部長も退会してしまい、今年から私がバトンタッチしての最初の発表会となりました。

舞台設定も大きく簡略化したり発表曲数や時間配分を工夫したりして、約二時間の舞台で行いました。文化祭のステージには各会において種々工夫し、練習に励んで来ました。今後の課題として伝統民謡ばかりで無く、いろいろバラエティーある出し物を工夫するよう検討してまいります。

応援してくださる皆様の期待できる舞台を作り上げてまいります。以上で今年の発表会の総括といたします。





青少年作品展を終えて

青少年作品部門 末 木 良 一

青少年育成甲府市民会議の地域環境部会では、「家庭の日」(毎月第一日曜日)と「青少年を育む日」(毎月第三日曜日)の普及、啓発の作文、ポスター、標語、写真を募集し、入賞作品を市民文化祭の青少年作品展で展示しております。本年は、十一月五日・六日に、総合市民会館展示室で開催いたしました。

コロナ感染の影響下ではありましたが、本年も甲府市内の小学校、中学校、各地区から三、七〇四点もの応募をいただきました。地域環境部会で審査をして、入賞作品の作文三十七点、ポスター四十八点、標語五十一点を展示いたしました。

二日間で入賞した皆さんを中心に四百人余りのご来場がありました。ご家族でのご来場も多く、三世代で一緒に写真を撮ったり、作品を前に微笑んだり頷いたり涙ぐんだり、展示室は温かい雰囲気になっていました。

青少年育成甲府市民会議は、未来を担う子どもたちが、健やかに逞しく育っていけるように今後も努力してまいります。皆様方のご支援とご協力に感謝を申し上げます。

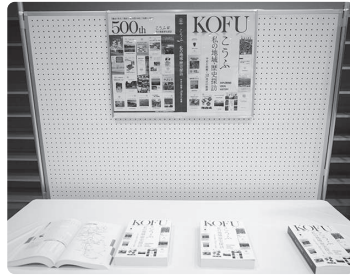




— 開幕式 —



第四十八回甲府市民文化祭



歴史探訪コーナー



— 表彰式 —

テーマ 「次世代へ 輝く文化 引き継ごう」

開催期間 令和四年十月二十九日(土)～十一月十二日(土)

開催会場 甲府市総合市民会館・遊亀公民館

開幕式 令和四年十月二十九日(土) 午前十時

展示九部門 華道四七点、文学一七四点、美術七五点、

書道一三五点、盆栽一七点、写真一六点、

工芸六五点、水石三点、青少年作品一三二六點

発表九部門 茶道八〇人、合奏二二二人、

吟剣詩舞道八五人、能楽一二人、演劇四二人、

邦楽一五七人、舞踊一二八人、民謡一〇〇人、

合唱二五人

歴史探訪コーナーを設け、小冊子「私の地域・歴史探訪」
〔甲府市内三十一地区〕の展示及びビデオ上映を行いました。

展示点(人)数 六八八

出演者数 一、〇八一

来場者数 延べ六、二〇九

実行委員会名簿

委員長 鶴田一杏
副委員長 奥山幾代子

委員

小笠原正人 下出祥司 中澤緑 奥山幾代子
小林明美 広瀬修 水上強 深澤弘
渡辺政幸 遠山忍 鶴田宗慶 保坂とみ子 相川宝楽

矢崎吼隆 宮澤忠治 森田芳弘 林勝
(以上文化協会) 石川顯 矢崎美咲 古川みや子 小泉泉
(以上展示部門) 岡田恭子 山縣清博 佐藤眞弓 寺本加声 三井環
(以上発表部門)

芹澤千束 深澤芳次 福田勝子 八田孝仁 小坂フキ子 戸澤清茂 服田尚隆 雨宮秀隆 清水明 内藤有一 功刀幸雄 森本陽子 佐藤一男 伊藤洽子 數野保秋 金子武仁

吉澤一家 末木幸造 高田宣雄 原野五郎 藤田亮 勝村武 立川茂 松澤栄二 山下栄知 米山幸雄 松野賀興
(以上地区文化協会) 文化協会 文化協会 浅利勝往 各種団体 飯田浩明
(教育委員会) 子ども未来部

あとがき

◇ 令和四年度、第四十八回甲府市民文化祭は、令和四年十月二十九日から十一月十二日まで七日間にわたり甲府市総合市民会館、遊亀公民館において開催されました。

◇ 前回の令和元年「こうふ開府500年」を記念した開催から三年ぶりの開催となった今年は、コロナ感染症を乗り越え「次世代へ 輝く文化 引き継ごう」のテーマのもと、各地区の文化協会、各部門、各流派の永年にわたる研鑽の成果が発表された文化祭でした。疫病による制約を受けける暮らしのなかから改めて文化芸術の大切さを確認し、実行委員会の強力な推進によって実現されました。多くの感銘をもたらした意義ある文化祭であったと思います。家族での来場も多く三世代で記念撮影をするなど会場はあたたかい雰囲気にも包まれていました。

◇ 展示部門では、三年ぶりでさまざま団体数の減少などがあり、楽しみの中にも不安を抱きつつ文化祭を迎えました。青少年作品を加え九部門がそれぞれ作品を展示、合計六八八点にのぼる作品が展示されました。青少年の作品には未来への希望を感じました。文学部では小学校六年生の詠んだ俳句が文学部賞を獲得しました。ベテランの円熟、青年の自由闊達な作品など、各部門の特徴を生かした展示

は、見ごたえある成果を示しました。

◇ 発表部門は、コロナ禍により距離の確保など配慮しながらの発表でした。茶道部はイベントモールをはじめ会場を広く使い大茶会を開催しました。合唱、合奏、邦楽、民謡、演劇、吟剣詩舞道、能楽の舞台での演奏、演舞が華やかに披露されました。伝統文化を継承し、現代に生かした舞台は、日頃の研鑽の技量を存分に発揮した舞台となつて、観覧するひとびとに深い感銘をもたらしました。

◇ この度の文化祭は、展示点数六八八点、出演者数一、〇八一人、参加者合計一、七六九人、来場者数延べ六、二〇九名。三年ぶりに開催された、文化協会をはじめ市民の皆様への文化に寄せる思いを存分に示した文化祭であったと思います。各地区文化協会、各部門、流派、団体の協力の賜物です。甲府市民文化祭実行委員会の方々の方々をはじめ、甲府市文化協会の総ての会員の方々、甲府市教育委員会、甲府市文化協会の担当の方々のご努力、ご配慮に、心から敬意を表したいと思います。

令和五年二月

編集委員長 井上 康明

編集委員会

委員長 井上康明
副委員長 広瀬修
委員 小笠原正人
数野徳子
土屋喜雄
深澤弘
矢崎吼隆
若林寿美子
(五十音順)

事務局
事務局長 早川守
事務員 横山弘美

「表紙写真の説明」

舞鶴城、南遊亀橋出入口附近、四月櫻の時期には、大勢の花見で賑わい、手入のとどいた木々も素晴しく、一年中、市民の憩の場になっています。

写真部長 広瀬 修

文芸こうふ

第二十九号

第四十八回甲府市民文化祭作品集

発行日 令和五年三月

編集 文芸こうふ編集委員会
発行 甲府市文化協会

甲府市丸の内一丁目十八番一号

TEL 055(223)7329

FAX 055(235)5648

お手元へ配布された冊子は、大勢の方にご覧頂けるように、友人・知人等へもお配りください。